

Q 40

vol.
SPRING
2013

人まち結ぶ、
響ホールの情報誌「Q」

○発行：(財)北九州市芸術文化振興財団
○響ホール
北九州市八幡東区宇野1-1 国際文化交流センター内
TEL.093-662-4010 FAX.093-662-0100
http://www.kicpac.org/hibiki

20th 響ホール
20thシリーズ

中村絃子 ピアノリサイタル

その指先から紡ぎ出される、
やわらかくも力強い音色に酔いしれる至福のとき—。
トップアーティストとして、また、一人の人間として
私たちを惹きつけてやまない中村絃子の魅力。

HIROKO NAKAMURA

Special
Interview

中村絃子 スペシャルインタビュー

才能と努力、そして何よりも
幸運に恵まれた50年。

— 20周年を迎える響ホールで3年ぶりのリ
サイタルとなりますね。

響ホールではこれまで11回演奏していま
すが、前回は2010年、私のデビュー 50周年
のときでした。節目を迎え振り返ると、
プロの演奏家として50年以上も続けてこ
られたのはとても幸せなことだと感じます。
常々思うのですが、一人の人間が何かを
達成するためには3つのものが必須です。
一つ目は才能。二つ目は努力。そして何よ
りも幸運。才能と努力だけであっても、幸運

が無ければ大成はできません。ですから、
私は本当に幸運に恵まれていたと思います。
時代の巡り合わせも幸いで、日本の高度成
長と重なるように私も成長していくことが
できました。というのも、私がデビューリ
サイタルを弾いた上野の東京文化会館はま
だ開館1年目で、これが日本初の本格的なコ
ンサートホールだったのです。当時は、ク
ラシックの演奏会も、音楽留学する日本人
も、今ほど多くありませんでした。そのた
め、今ピアノを習っている子なら弾けるよ
うな作品を当時の私が弾くだけで、評論家
からお褒めの言葉をいただくたり(笑)。
そういう時代に生まれたことも幸運でした。

「響ホール20thシリーズ」の一環として、日本を代表するピアニスト・中村絃子が
再び響ホールに登場する。2009年にはデビュー50周年の節目を迎え、今なお第
一線で輝き続ける中村さん。その尽きない情熱とパワーの源、自身の軌跡、6月開
催のリサイタルなどについて語っていただいた。

取材・文：堀田 桂子

音楽は楽しんでいいものだと
分かった時は衝撃的でした。

—そもそもの西洋の音楽であるクラシック。
日本では、どのように広まったのですか？

明治時代にクラシック音楽が入ってき
てから、日本人はみんな西洋に憧れを抱
き、それまで聴いたこともないベートー
ヴェンを聴き始めました。けれども、明
治・大正生まれの先生方はピアノの教え
方も弾き方も分からないから、形楽隊で
受け継がれてきた精神論で生徒を教えよ
うとしたのです。先生の指導とはにかく
厳格でしたし、生徒はその教えを履き多

くいただくもの。当時は音楽を楽しみな
んて「けしからん」こと、つまり不謹慎で
生意気なことだったのです。私もジュリ
アード音楽院に留学して初めて「音楽は
楽しんでいいもの」と知り、天地がひっ
くり返ったような衝撃を受けました。そ
れまでの私にとって、音楽は厳しく辛い
ものでしたから。また国内でも、そうい
った概念が、1964年の東京オリンピックと
1976年の大阪万博をきっかけに崩れまし
た。日本はお金のない戦国時代から脱却し、
世界に通用する先進国を目指して、発展
のエネルギーにあふれた「新生日本」を
海外にアピールしたのです。